

言心先生の中国便り

誤報の裏側

九月八日の未明、国際オリンピック委員会（IOC）総会が2020年の五輪開催国を選ぶ投票をしていた

最中、中国の中央テレビと中国最大の通信社新華社は、それぞれ東京は敗退とイスタンブールが開催権を獲得と誤報した。地方の「長沙晩報」は、この間違い速報を引用して、新聞の一面に大文字で印刷した。後に、この新聞の副編集長は、数万部の誤報紙の印刷により大きな損害に対し、新華社を相手にとって損害賠償の民事裁判を起こしたいと述べた。

中国のネット利用者は、この誤報事件が媒体を専攻する学生の最も良い教材になるとしてこの東京敗退を報じた「長沙晩報」を大切に

收藏して、数十年後には、高価で売れるかも知れないと辛辣に皮肉った。

今回の誤報事件は、ただ不注意で偶然に発生したことではなく、中華思想の陰湿な意識を背景とした必然的な結果だと思ふ。

まず、中国人の性格の中で、焼きもち・嫉妬といった感情は、日本人より倍以上に強い。2008年の五輪開催地の誘致時期、日本は、無条件でアジアの隣人北京を支援した。しかし、今回の2020年のオリンピック開催地の誘致中、中国の態度は曖昧で、アフリカのIOC委員に対して、露骨に日本に投票しないように働きかける場面もあった。中国の諺「損人不利己」（他人に害を与える事は自分の利益にならず）を日本人はなかなか理解できないかもしれない。自分の隣人が自分より良い家、良い車、良い家具を所有することは、相

当な中国人にとって何より苦しい事である。

また、中華思想の中では友と敵を二分する意識が強すぎる。毛沢東の有名な言葉に「敵が反対することに凡て、我々は擁護する。敵が擁護することに凡て、我々は反対する。」がある。当然今の日本は、領土と歴史の問題で中国にとって真正銘の敵で、出来るだけ失敗して苦しい、悲しい面目を見たいという対象である。

ある評論家は、中国の

ネット上で、中国中央テレビと新華社の媒体人が、日本の敗退を最も望んでいたため、突然に入ったニュースのある部分と自分の希望を合致させ、再確認せずに速報したと分析した。

中国のある専門家は、日中両国の子孫が百年後に2013年の両国摩擦の緊張関係を教科書で勉強した時には、まるで子供の喧嘩の様だとの感想が出てくる

と論評した。同感である。

